

〈インタビュー〉第一高等学校・東京大学における戦後学生自治活動（一）

—岡田裕之氏に聞く—

田中 智子

はじめに

東京大学は、戦後学生運動の中心であった。一九四八年九月に結成された全日本学生自治会総連合（全学連）においては、その設立の過程において東京大学学生自治会中央委員会が中心的な役割を担っており^①、その委員長であった武井昭夫が全学連初代中央執行委員長に就任している。また、戦後学生運動においては日本共産党との関わりが不可分のものであるが、五〇年一月の「コムンフォルム批判」^②を契機とした共産党の分裂の際には、東大は国際派共産党の中心となった。

その拠点となっていたのが、東京大学学生自治会中央委員会をはじめとする、学生自治組織である。この学生自治組織の内実を明らかにすることは、戦後学生運動を研究する上で極めて重要である。しかしながら、敗戦直後の学生自治組織の活動を記録した文書資料は極めて少なく、活動の詳細を知るためには、当事者への聞き取り調査が必要不可欠である。

本稿においては、敗戦直後の第一高等学校および東京大学において、学生自治組織の活動に関わった岡田裕之氏のインタビュー記録を紹介する^③。岡田氏は一九四五年第一高等学校理科甲類に入学、病気休学を経て五〇年に（旧制）東京大学経済学部に入學、五三年に卒業する。その間、一高・東大の多くの学生自治組織に関わり、卒業後も日本戦没学生記念会（わだつみ会）に事務局長として関わるなど、精力的に活動された。

本インタビューは二〇〇八年一〇月二〇日、法政大学市ヶ谷キャンパスにて、筆者と一対一の対談形式で行った。その後テープおこしを行い、岡田氏自身が加筆修正を行っている。インタビューの内容は多岐にわたっているため、筆者が項目別に整理・再編し、補足が必要な箇所に注釈をつけた。また、紙幅の都合により、二回にわたって分載する。

〈岡田裕之氏インタビュー〉

一、第一高等学校および東京大学の学生（生徒）自治組織

田中 岡田さんは学生自治会の委員をされていたのですか。

岡田 ええ。当時の学生自治会は学生全員のオール組織ですから、自治会がすでに組織されていた大学では、学生は入学とともに自治会員となります。これは戦後学生運動の特徴です。全学連（全日本学生自治会総連合、一九四八年六月設立）は各大学・各学部
に自治会組織があつて、その上に立つ全国組織です。学生自治会は正式には——形式上はと言うべきでしょうか——全員参加の学生大会を最高機関とし、会員の選挙で選ばれる自治委員会がその
経常活動を実施します。その代表者が自治委員長で大学当局やその他との交渉にあたります。五〇年に入学した東大経済学部の場合には、ゼミナール単位選出の自治委員と自由区選出の自治委員がありまして、私は当初は自由区選出、後にゼミ（大河内一男ゼミ）選出で委員に選ばれました。

一高の場合には寄宿寮が全寮制の自治寮でしたから、これも生徒は入学とともに全員が自治寮生となる建前で、自治寮は各室毎の総代で構成する総代会が最高機関で、互選された寮委員会は自己責任の原則「四綱領」^①に基づき寮紀律維持から寮生の処分権まで持ちました。文部省管轄下の学校当局は当然、思想案件を含む学事事項について処分権を持ちます。総代会で「退寮」決定となればすなわち学校も退学です。食事の確保や紀律を含む大きな権限を持ちますから、総員の選挙で選ばれる寮委員長、副委員

長の権威は大きく、寮生の尊敬を集めるだけの立派な人物が選出されました。この委員長の下に食事・文化・雑貨・会計・渉外・風紀点検（愛称フーテン）などの委員が寮委員会を構成し、日常業務にあたります。ただし総代会、寮委員会とも一高（学校）の生徒活動と寮生活の経常業務や伝統的な年中行事が主要な審議事項で、政治論議は本来は例外的な主題でした。第二次大戦後の学生自治会の組織化、政治化とともに次第に政治的なテーマが論議の主題となってきましたが、戦後は一高では自治寮が学生自治会を代行していました。平岡茂樹君（第一七五期寮委員長）はこの資格で関高連（関東高校連絡会議、四七年二月設立）に参加していました。

総代会の運営は各部屋総代の発言討論が基本ですが、総代会では、教員といえども発言許可を得てから発言するし、また議長権限で総代以外の出席者の発言も認められ、総代でなくとも「議長番外」——部屋総代は「北寮十番」などと部屋を名乗ります——と手を挙げ発言を求め、議長はこれに応じて「番外君」の発言を促します。東大の学生大会のほうは政治的な主題が中心でしたから、発言者も過激だし、反論も激しく汚い野次もひどいものでした。ここではすべて討論は政党ないし政治組織がらみでした。

田中 一高の自治寮の自治と東大の学生自治会の自治は随分と違いますね。

岡田 東大では自治委員ではありませんが、自分の帰属意識は五〇

年五月に組織されたばかりの「反戦学生同盟（Aのアンチ・ゲール、アー・ジェーと称す）」という活動家組織のメンバーである方が強く、自治会は、同盟の目的である〈反戦〉に広く学生を巻き込む運動体だという理解です。

この点一高の総代会は寮自治こそ主題で、きちんとしていました。もともと総代会出席は義務的でしたから、部屋の寮生が交代で出席したり、「忙しい」とか「いやだ」と言う生徒も多かったです。しかし東大の学生大会では仲間に囲まれている組織員ならともかく、個人では発言にはかなりの勇気を要します。反共演説などしようものなら「ファシスト！」など下劣な野次が共産党員から浴びせられます。

なぜ自治会より反戦学生同盟に帰属意識が強かったか、と言うと、私の場合、もともと高校時代から反占領軍闘争を実施すべきだと考えながら、占領下、まともに反米を掲げる運動はなく、東大の学生共産党（日本共産党国際派東大細胞）のみが日本共産党主流派に抗して、〈反アメリカ帝国主義〉を掲げていて、朝鮮か台湾か、迫り来る第三次世界大戦の火蓋を防ぐべきだとしていました。私は、東大学生運動のこの方針に深く共感したのです。極端に言えば東大に入学してはじめて堂々と反米闘争が出来る、と入学の第一目的のごとくでした。

田中 岡田さんは一高自治寮ではなにをなさっていましたか。

岡田 高校時代はひたすらドイツ古典哲学、特にカント、ヘーゲ

ルからマルクスへの流れと実存主義のキエルケゴールとハイデッガーの哲学研究にうちこみました。実存主義とマルクス主義は時代の問題でした。主体性論争の真下信一先生が哲学研究会の指導教授でした。こうして唯物論、唯物史観に接近しましたが、総代会には出席したことはありませんが発言せず、自治にはあまり関心がありませんでした。ただし四八年全学連の前身である国学連国立大学学生自治会連盟、四七年設立）の授業料値上げ反対の呼びかけに応じて一高では哲学研究会Ⅱ中寮二八、二九番が中心となり「授業料不払同盟」を作り総代会で論陣を張りました。これには私も積極的に賛同し、同盟委員長の石川大海君などと共に国会に森戸文相を訪問、値上撤回交渉をしたことがありました。

私の思想的関心については省きますが、東大でも研究と言うか勉強にも関心は強く、反戦学生同盟のほかに「ソヴェト経済研究会」を組織し、他学部の「ソ研」とともに「ソ研連合」となりました。後のドストエフスキー研究者の馬場宏（江川卓）君やポランド文学の工藤幸雄君などと知り合いました。「ソ研連合」は「民主主義文化団体協議会」略称「民文協」に加盟しました。民文協の「世界文学研究会」には詩人経営者で名をなした辻井喬君などがおりました。ほかに欲張って「産業経済研究会」を組織したりで、大学で勉強する計画もあつたのですが、全学連の反米闘争が盛んになり、勉強を放棄して学生運動に集中しました。当時の東大は反米、反戦の熱気にあふれかえっていましたから。自治会もさることながら、自治会はそうした目的を実現する「動員手段」と見

ていたのでしよう。反対に「全学連学生運動のため」に「反戦学同」や「民文協」が手段、下部組織だったと言えるかも知れません。私自身、反戦学同の活動も民文協の活動もほとんど区別しませんでした。ですから自治委員、委員会での独自の活動は、と聞かれると答えられないのです。

田中 自治会の活動はあまりされていなかったのですか。

岡田 だから自治会も反戦学同も民文協も活動はみんな一緒くたです。「研究」といったところで幼稚なひよっこ同然、学生運動が多忙になれば中断です。私は「わだつみ会（正式名称は日本戦没学生記念会）」にも参加し、東横映画（現在の東映）『きけわだつみの声』の宣伝員でもありました。この会は、前年、東大協同組合出版部が刊行した『きけわだつみのこえ——日本戦没学生の手記』（現在は岩波文庫）を受けて、学徒が学問を捨てて戦場で死ぬことが二度とないようにとの決意から、五〇年四月に遺族・知識人・学生が設立した平和運動組織です。全学連の運動もこの会の設立期には会の記念事業と一体のものでもありました。その後、この運動は私の生涯をつらぬく主題の一つとなります。

田中 自治会も反戦学同も皆一緒くた、というのはどういうことですか。

岡田 自治会活動も文化活動も反戦運動もみんな一緒くたで活動家に区別はありません。「反アメリカ帝国主義」のスローガンは新

鮮で、それこそ東大生は若きインテリゲンチアとして先駆けて反占領軍を闘うとの熱気です。五月はイールズ闘争で幕開けでした。「イールズ」って知っていますか？ 占領軍CIE（民間情報局）顧問で大学からの「赤色教授（共産主義系教授）」の追放を求めて全国大学を講演して回っていました。彼の演説は五月二日東北大で学生の抗議妨害に会い、流会となりました。学生の組織的反米闘争が始まりました。東北大自治会から「イ・ゲキタイハンテイバンザイ」と全学連宛に電報がとどき、自治委員として私は激励の返電を本郷局から出しました。全学連、東京都学連は直ちに占領下初めての反米デモを行いました。戦前の共産党弾圧が自由主義の弾圧にいたり、結局多くの学徒が戦死したのはつい数年前のことでした。レッド・ページ反対、へわだつみの悲劇を繰り返すな。の叫びは大地に滲み通るように学生に滲透しました。反戦学生同盟もわだつみ会もフル回転です。朝鮮戦争の逼迫感は一しひしと迫ります。レッド・ページはすでに新聞関係で進行し、大学からの共産系教授の追放も実施されそうです。これを防ごうとしたのが反レッド・ページ闘争です。

田中 そうですね。大学ではレッド・ページは結局なされなかったんですね。

岡田 新聞界や労働界ではレッド・ページが実行されて首になった人々は多かったのですが、大学関係では結局「赤色教授追放」は実行できませんでした。学生、自治会、活動家の犠牲——処分、

就職拒否、貧困など——も大きかったのですが、とにかく闘争により目的は達成できました。

二、共産党との関係

田中 自治会は共産党員のみで構成されていたのですか。

岡田 いや、共産党員（国際派）も多かったが非党員も多かった。フランス・レジスタンス（抗ナチ）の「神を信ずる者も信じない者も」です。ただ高校自治寮の自治とは違って、学生自治会の（自治）は共産党（東大では国際派）指導下の（自治）で、そこに深刻な問題がありました。考えれば——当時は私自身が党員で、前衛による自治会や同盟、文化団体を「大衆団体」と呼んで、これを「上から指導する」と言う意識でした——この前衛党による指導、ボルシェビキ型の上下組織関係というか、が一時的に成功して学生を大衆的に動員したとも言えるが、同時に、これが戦後学生運動の深い病根となって六〇年代末期の大学解体の全共闘運動の自滅に帰着した、と言えます。五一年に私は、新制東大（駒場の教養学部）の国際派細胞の指導に当たった時、哲学も語学も数学も経済学も勉学を一切放棄してひたすらスターリンや毛沢東だけを指針に仰ぐ駒場寮の活動的な寮生に直面して驚きました。ボルシェビキ型学生運動の自滅への道でした。こうして当時「大衆団体」内の「党員」は、全力を党に国際派決定の実現に邁進しますから、どの団体の行動も一致調整されるし、画一的になります。活動はすべて一緒くた、とはそういう意味です。

田中 岡田さんが共産党に入られたのは何時ですか。

岡田 一九四八年二月です。反米の色彩の強い一高記念祭に米軍が干渉する動きがあり、実際に米軍のインボデン中佐が視察に現れました。その際に共産党細胞が反米デモで少人数ながら赤旗を時計台校舎に翻すこととなりました。初めての反米闘争に参加して感動し興奮し、マルクスの革命とハイデッガー的投企を重ねた入党決断に至りました。主体性論争の一つの（解決）でした。ここから私の党活動とマルクス『資本論』研究の時代に入ります。

田中 当時の自治会運動、その背後にある国際派共産党はやはり宮本顕治氏（当時中央委員、後に共産党議長）の指導を受けていたのでしょうか。

岡田 東大は宮本派です。でも主流派も少いしましたし、教職員や秘密党員はほとんど主流派でした。志賀派もありました。早大左翼は百花繚乱で、神山派が一定の影響力をもち、宮本派・東大系の国際派もかなり多数でした。両派は一本化しないまままで反レッド・パージでは協力します。主流派はごく少数でした。共産党諸派のこうした分裂は、五〇年一月のコミンフォルム（ヨーロッパ共産党・労働党情報局、四七年設立、コミンテルン国際共産党は四三年解散）の野坂批判に始まるもので、コミンフォルムは野坂参三氏を「アメリカ帝国主義の召使」と罵倒しました。この批判に徳田球一、伊藤律、野坂、志田重男氏ら中央委員の多数は反対しましたが、志賀義雄、神山茂夫、宮本、袴田里見氏らが批判に

賛成し、方針を改めるべし、としました。このグループは国際批判を受け入れたので「国際派」を自称し（神山氏は中間的でした）、主流派は『アカハタ』に所感を発表してコミンフォルムに不快感を表明したので「所感派」と呼ばれました。全学連⇨東大細胞はこれを四九年の徳田・伊藤の「地域人民闘争」路線の否定と受け取って、代々木執行部に対抗して反米・反帝国主義の全学連全国闘争路線が支持された、と誤解します。後に判明しますが、スターリン、毛沢東らの中ソ国際共産党は、朝鮮戦争とアジア武装革命方針から日本共産党に戦線の背後における武装闘争を求めたのでした。国際政治の冷酷な打算を知らない東大学生運動は真面目な分だけ滑稽な結末となりました⁶⁰。

ともかく当時は東大細胞は宮本氏支持に一本化して運動を展開します。反レッド・パージ運動が後退すると国際派は主流派学生に押され、「分派」のレッテルを貼られて苦戦します。私が新制東大に派遣されたのもその為でした。五一年夏、これは完全に破綻し国際派は解散しました。でも旧制東大、本郷では国際派は最後まで圧倒的多数でした。宮本氏は当時は党内で孤立して中国地方の党と全学連くらいしか支持者がいなかった。

田中 宮本氏の指導と全学連は終始運動していたのですね。主体性論争の渡辺恒雄氏の件はよく知っていますか。

岡田 主体性論争は一高時代に哲学論争として知っているだけで、四七年一二月東大細胞（党支部）第一次解散令（第二次解散令は

五〇年五月の国際派細胞解散）については後に知っただけです。これはボルシェビキ型全学連の出発点と言うべき事件で、武井昭夫君（初代全学連委員長）や力石定一君が強調するところですが、しかし振り返れば中村正光氏の排斥など、氏は東欧における共産党、ソ連の横暴を批判したのですから、先駆的でもあり、正しかったは中村氏の方でした。武井君は「右翼反対派」を批判するとき、四七年当時の渡辺、氏家斉一郎氏らに対する批判と五〇年当時の関西学連批判を同等に並べますが、これは共産党を基準にすると、四七年当時は武井君たちが党⇨ボルシェビキ派で、五〇年当時には関西学連が党⇨ボルシェビキ派となります。

三、他大学との関係

田中 京都の方はどうでしたか。米田豊昭（京大主流派の三代目全学連委員長）さんのお話を伺っていますか。

岡田 京都の学生運動と東京の学生運動は主流派指導と国際派指導で対立していました。全学連の下部組織で言えば関西学連と東京都学連の対立です。東京はマッカーサー占領軍の膝元でしたし、反米の機運が強く、京都は政治的には鈍く共産党の権威が強かったのでしょうか。東大の教員党员は「我々は権力に弱いんで」と学生に弁解していましたが、京大は学問分野と異なり学生運動では主流派に弱く、火炎ビン闘争でもお先棒で不愉快でした。五二年六月、京都立命館大学で開かれた全学連第五回大会に際し、関西の反戦学生同盟員と国際派代議員を京都の「人民警察隊」（共産

党非合法武装組織)が立命館大学の地下室に「逮捕監禁」しリンチを加えた不祥事が起こりました⁷⁾。後の哲学者廣松渉氏もこのとき「逮捕」されています⁸⁾。

田中 お茶の水女子大学はどうでしたか。

岡田 東京都では国際派と東大の影響は大きなものでした。女子大では東京女子大も国際派でした。『私の女高師、私のお茶大——一九五〇年代学生運動のうねりの中で』(私家版 二〇〇四年 一二月)をお読みになりましたか? どちらも東大からのオルグのために国際派支持となりましたが、国際派の失敗、破綻、解散と東大生はかなりの議論をして結論を出したから納得すぐでしたが、女子大の活動家は東大生ならと鷗呑みに信用していた面が強くと、解散やらその後の主流派への復帰やらわけも分からず混乱しています。東大が変わったから変わるという受身です。これは東大生の責任でもあります。

田中 そうなんですね。先生のご本には金沢大学に全学連オルグで行かれた話がありますが⁹⁾。

岡田 五〇年六月のことでした。アジアで米ソ中对立の東西冷戦が火を吹くのは朝鮮か台湾か、ものものしい雰囲気の中に六月二五日、朝鮮で南北戦争が勃発したその日にオルグの同志、出島靖君と東京駅を出立し、東海道線で金沢に向かいましたから忘れ得ないことです。

東京駅で岡山に帰省する佐藤経明君と乗り合わせとなり、車中、三人は、侵攻は南(韓国)が先か北(北朝鮮)が先か論じました。当時左翼では南⇨アメリカからの侵略論が支配的で、議論は直前のジョンソン(国防長官)、ダレス(対日講和顧問)、ブラッドレー(参謀本部議長)の南鮮訪問、38度線視察に集中しました。「この三人がけしかけたんだ」、全学連は、資本主義アメリカは戦争を必然化し社会主義ソヴェト同盟は平和を守る、の単純な悪玉・善玉論です。勿論事実は反対で北からの侵略でしたが、この時は考えもありませんでした。米原で北陸線に乗り換えましたが、石炭で走る昔の汽車はつぼですから敦賀—今庄間の登りの長いトンネルでは窓をいくら閉めても客車の中は石炭の煤煙もうもう、三十分くらいむせてむせて乗客全員が七転八倒、すすだらけとなりました。

このオルグは全学連の反米反レッド・バージ闘争を全国で展開するためのもので、北陸、九州の各方面に委員長武井君の指令で派遣されたものです。旅費は片道分で食費宿泊費は勿論、帰京の旅費まで派遣先の自治会を全学連に加盟させ、その加盟費でまかなえ、というものです。新制金沢大学は旧制四高の後身でおなじ場所(金沢城内)にあります。全学連には未加盟です。それを弁舌さわやかに説得し加盟させ、反レッド・バージ闘争の準備をさせ、さらに足を伸ばして富山大学自治会と福井大学自治会を合わせて北陸学連を組織する、これが二人の任務でした。自治会にいてもあるかないかも分からない。なかつたら新しく組織せよ、

ということですが。社会人からしたら無茶苦茶な指令です。しかし危機感からか使命感からか、ご無理ごもつとも引き受けました。

金沢は落ち着いた城下町でしたし前田利家の金沢城は天守閣こそないものの歴史の香り高い城でした。だがそれどころではない。到着と同時に城内の寮にある自治会で活動家に会いました。それがちょうど寮と大学が対立し紛争の最中で、そのために「全学連が応援に来てくれた」と初対面の二人は大歓迎を受け、食費も宿泊費も寮生とこみでただとなりました。東京と全国の学生運動状況を話す自治委員は繰出で聞いてくれ、これから学生大会を開き大学当局を糾弾するから出席して全学連を説明し、加盟を提案して呉れ、とのこと。渡りに舟とはこのこと、弁舌さわやかかどうかは知らないが一世一代の名演説、拍手喝采の大成功、全学連加盟となりました。次は富山と福井だと富山大学の活動家を紹介してもらい富山に行きましたが、ここは運動は全く低調で動きはありません。福井大学は見込みないでしょう、というので福井行きはあきらめました、意気揚々と帰京しました。学生運動でこういう純朴なこともありました。

このオルグに際して私は雨傘をはなさず持つて歩いていたため、出島君に「ダレス」とあだ名をつけられました。38度線視察の時、眼鏡のダレス氏が傘を手に前線視察をしている写真が新聞各紙に大きく出ていたためです。仲間内のあだ名は「ヒス」「腐敗」「ゴリカン」「けつ（尻）」「キタナイスキー」「公式」「ハンタロー」「ホットテン」とたくさんありました。出島君は「デジ」で

省略でありルーマニア共産党書記長ゲオルギウ・デジのもじりです。銀林浩君の「銀ちゃん」もこれに近い。

田中 第四高校については当時の活動家の方が『戦後四高学生史』

(勁草書房、二〇〇一年九月) という本を書き残されました。

岡田 それは見ていません。

田中 それは多分、戦後四高自治会が出来た頃の最初のものです。

岡田 四高卒業生の友人はいますが本のごことは聞いていませんでした。

田中 四高生徒自治会が自動的に金沢大学学生自治会に切り替わったかと思っていました。

岡田 戦後学制はめまぐるしく変わりましたが、ちょうど旧制と新制の切り替えどきでした。東大は四七年、帝国大学から東京大学となり、四九年旧制高等学校は廃止、生徒募集を停止、東京大学は新制東大となります。四八年の一高入学者は、卒業後旧制東大は消滅して受験できずさりとて一高の後身である四九年設立の新制東大に自動的に入学できないので、中退して四九年新制東大を受験するか五〇年に受験するほかありません。他の旧制高校入学者も二度受験の憂き目となりました。私といえば四五年に旧制一高入学、五〇年旧制東大入学、五三年同校卒業です。制度は旧制で通しましたが、四五年には戦時の教育年限短縮で中学は四年卒業、従来の五年卒業生と一緒に入試、五三年の大学卒業では旧

制最後の卒業生と新制第一期生が同時に卒業で、二回とも競争相手は二倍に増えました。

四高に自治寮と並行して生徒自治会があっても、新制切り替えで金沢大学となれば学制上四高より格上で（高等教育は合計で二年短縮）、自治会も改めて組織されねばなりません。全学連に加盟したのは金沢大学自治会です。

田中 そうすると他の大学自治会の加盟も同じやり方で進めたのでしょうか。

岡田 どのようにしたのでしょいか。他大学の場合は知りません。私どもの時は孤立した全学連の反米反レッド・パージ闘争の全国化のための集中オルグでした。九州、中国、北海道、中部と出かけた筈です。初期にはバラバラ個別的にやっていたのではないでしょいか。

田中 武井さんが書いていますが長野師範の闘争での全学連オルグの話があります¹⁰。

岡田 共産党分裂以前ですね。四八年のことです。師範側の無理解な学生処分が発端で東大から安東仁兵衛君、飯田十郎君、一高から高沢寅男君、戸塚秀夫君が派遣されました¹¹。

田中 この時期は多くの高校・大学で学園民主化闘争が起こりましたね。一高はどうでしたか。

岡田 戦争中一高では自治寮制が実質上守られていました。高校

自治寮制は遠く明治期の初代文相森有礼の構想と木下広次一高校長の方針から生まれた独特な制度で、日本の高等教育上の特例とも言え、将来の指導層たるべき自主的な知的青年の育成に大きな成果をあげました。自治寮制は高校の新設、増加とともに全高校におよび、設備上三年間の皆寄宿制は実現できませんでした。一九四〇年近衛新体制の時期まで維持されてきました。政党政治を最終的に否定した日本型ファシズムの近衛新体制は、同年八月、高校自治寮制の廃止を決定し、学校側の任命制、寮監による軍隊式統制を各高校に強制しました。自治寮廃止は高校および高校生からの反対をよび、抵抗を受けました。四〇年末の福岡高校学而寮の反対運動は近著『日本戦没学生思想』（法政大学出版局 二〇〇九年七月）に特記する予定ですが、福岡高校は敗れて屈服します¹²。日中戦争から太平洋戦争へ戦時体制が整備される中で多くの高校が自治原則を失いました。しかし一高は重ねて例外でした。一高は安倍能成校長の巧妙、柔軟かつ強固な抵抗により自治寮制は四四年まで形においても維持されました¹³。さらに同年任命幹事制に移行しても一高には言論と思想の自由はのこり、戦死した出陣学徒兵も自由で知的な一高自治寮への思いを感銘深く記しています。こうして戦後、一高では戦犯教授追放など過激な運動は起こらず「正門主義」の是非など浮世ばなれしたのんきな論争が起こったのです。

他の大学高校では厳しかった統制の反動から、戦後激しい戦犯

教授追放運動とともに自治要求が爆発します。それでも旧式の師範教育では自主的生徒が過激な分子に見えたのでしよう。秋田師範、長野師範の事件もこの種のものでした。

田中 金沢大学には早稲田の方もオルグに加わっていたとのことです。すが。

岡田 大金君のことですね。大金久展君は小学校時代からの友人で今でも仲良くしています。一〇月の反レッド・パーヅ闘争の時は東大から伊藤茂君、早大から大金君らが赴き大デモを成功させました。伊藤君は後に村山内閣の運輸相になりました。反レッド・パーヅ闘争の高揚はそこまでで、一〇月一七日の早大大隈講堂突入強行、警察による逮捕弾圧、早大生の大量処分で運動は失速、衰退します。挙句起こったのが東大査問事件という国際派の内部分裂でした。

田中 全学連運動はほとんど東大が中心だったようなお話しでしたが。

岡田 中心部はそうですが、運動全体ではそんなことはありません。一〇月闘争では早大は大きな役割を果たし、かつ逮捕一四三名、処分八六名の最大の犠牲を払いました¹⁴。後に述べるように退学処分でも東大は一札入れれば復学できますが、早大は「除籍処分」で復学できません。過酷な闘いでした。東京都では東大の本郷と駒場、早大が学生運動の中心でした。中大、明大など駿河台

の大私学の参加はいまだしの状況でした。

田中 早大は早くから運動が盛んでした。

岡田 私も武井君の本から知ったのですが、戦後の本格的な学生自治要求は早大から始まったとも言えます。自治会への大衆参加は早大の方が大規模でした¹⁵。早大の学生は特に戦争からの学園復興、学生自治、国庫補助獲得——これはやっと七二年に実現します——に熱心でした。序ながら、学園復興では、東大自治会は「きけわだつみのこえ」の前身である自治会編集の東大戦没学生の手記『はるかなる山河に』（東大協同組合出版部 一九四七年二月）の印税で大学にピアノを購入寄付し、現安田講堂地下の学生食堂（元第一食堂）を業者の「須田町食堂」から買収しました。

田中 武井さんの本に、早大の学生がデモを組んで東大まで来たとありましたが、いつのことですか。

岡田 四八年一〇月一三日のことです。早大学生二五〇〇名が東大を訪問、これを迎えた東大生五〇〇名とともに国立私立の授業料値上げ反対などを決議し、安田講堂までデモを行いました¹⁶。

田中 私は学部は東京女子大で、東女には当時から学友会の組織がありますね。

岡田 東女（略称トンジョ）には五〇年の反レッド・パーヅの時でしたか、五一年の反軍事裁判事件の時でしたか、寮生の集会で演

説をしました。中央線の電車から美しい校舎がみえますが、建物にQUAECUNQUE SUNTVERA——なべて真実なるもの——と掲げられています。四八年、友人の恋人だったAさんが友人と込みで私を記念祭に招待してくれました。女子大生からご招待など初めての経験で胸をときめかせて荻窪の学校にまいりました。その時仰ぎ見たのがこの文字です。爾後星霜六〇年Aさんとお目にかかり懐かしき昔を語りましたが、我々の傍らに上田建二郎（後の不破哲三）君、島田豊君と戸坂嵐子さんがいた記憶があります。嵐子さんは敗戦直前に獄死した抵抗の哲学者戸坂潤氏の令嬢です。

女子大オルグは東大活動家には願ったりの仕事で志願者も多い。「女子大でなければ行かない」などという勝手な男もいました。女子大オルグの縁で伴侶をつかまえた人も何組あります。それが急に私にお鉢が回ってきて東女に行くこととなりました。日中授業中は目立って具合が悪いから、夜寮に来て欲しい、合図して案内するから塀を乗り越えて下さい、と委員長のBさんは言います。びっくりしました。

田中 守衛さんがいますから、塀を乗り越えないと駄目ですよ。

岡田 合図に従って塀を乗り越え寮に入り込むと、部屋には数十名の寮生が集まって待っていました。汚い駒場寮とは全く異なるごみ一つない清潔な寮でした。深夜女子大寮にもぐりこむとはジュリアン・ソレルの役どころですが、そこは政治青年、色気なしの

演説商売、質問反応もよく、また塀を乗り越えて帰路につきました。今となっては不思議な一夜の青春物語です。Bさんはその後どうされましたか。忘れられません。

田中 佐藤経明さんの奥さんはお茶大の活動家だったのでね。

岡田 オルグの成果でしょう。経過は聞いておりませんが、夫人はお子さんを残して若くして亡くなりました。佐藤君も苦勞されました。

田中 そうですね。岡田さんが学生だった頃の、女子大の活動はどうでしたか。

岡田 五〇年代当時は東女もお茶の水も学生運動は活発でした。

田中 そうだったんですか。今とは違いますね。

岡田 学生はみな貧乏でしたが、東女の方が生活水準が上でしたかね。お茶大は貧乏な印象です。

田中 今でも貧乏ですよ。

岡田 貧乏と言うか学生で一番貧相な服装をしていたのは芸大（東美校）で、次は高師（教育大）と外語でした。外語は寮もボロでした。東大も貧乏学生が多かったがそれでも割とそれなりの格好をしていましたよ。お茶大はその上位かな。東女ははるか上です。良家の子女の感じで、私学ですからお金はかかります。

田中 私学と国立では学生の質も違うんですね。

岡田 私は私学（中学と大学院）と国立（高校と大学）の両方で勉強しましたからそれぞれ特徴があると思いました。私学では学生生徒は余裕があつてのんびりした学生生活が送れますし趣味も豊かです。国立の学生は真面目で堅い人柄の印象です。一高に入つて驚いたのですが一日十時間も自発的に勉強する生徒がかなりいました。勉強しなくともいつも成績拔群というのもしましたが。私は勉強すればそこそこですが、手を抜けば下に落ちました。一高では期末の成績は一番からビリまで順位が公表されます。いわゆる番付で、取り立てた差別がありません。みんな平気でした。

田中 やはり一高は格が違いますね。

四、学生処分の方針

田中 東大芙蓉寮事件のご存知ですか。

岡田 四九年四月のことですね。四九年は浪人中でしたから東大の闘争は知りません、あとから聞いただけです。ついにながら浪人中、私は党文京区委員会の水道端細胞に属して「地域人民」闘争に関わりました。その闘争たるや大衆欺瞞のひどいもので、九月革命論とともに徳田・伊藤執行部に愛想を尽かしました。五〇年正月、先に東大に入つていた戸塚君から全学連と東大の「意見書（共産党本部批判意見書）」^①を見せてもらい、共産主義を目指して反米闘争をするには東大の国際派に入るしかない、と決意しました。「地域人民」は廃業、急いで猛勉強で合格、晴れて国際派に献身します。

田中 どのような事件であつたと聞いていますか。

岡田 看護学校の生徒が寄宿舎の人権無視に抗議したからの理由で二三名が正看護婦に採用されなかつた事件です。看護学校生の訴えに東大の学生組織は大々に応援し、病院長の辞職と二三名の採用を勝ち取りました。闘争勝利の記録です。看護学校の生徒の応援でしたから東大生もお熱をあげて泊まり込んだそうで、五〇年入学の私もあれこれ武勇談から恋愛譚まで聞かされました。芙蓉寮紛争の原告⇨裁判長南原繁、被告安東仁兵衛なる学内裁判がまだ続いていました。

田中 京大でも同様の事件があつたそうですね。

岡田 それは初耳です。

田中 東大は勝利しましたが京大は最後まで不採用でした。

岡田 どうしてですかね。

田中 やはり東大と京大では運動の質が違いますかね。

岡田 戦後学生運動では国際派⇨東大と主流派⇨京大で対立しました。闘争主題では同じ五一年に起きた東大の反米軍事裁判闘争と京大の天皇公開質問状事件が対蹠的です。東大では反占領軍が主題で京大では過去の日本の戦争責任が焦点でした。主流派は前者をアメリカ帝国主義と分派の「茶番」とし、東京では天皇事件を闘争テーマにしませんでした。氣勢を上げる闘争歌も違いました。

東京の学生は「国際学連の歌」か「青年よ団結せよ」、関西の学生は「解放の歌」といった具合です。

でも一番の違いは処分学生の復学の措置についてでしょう。

田中 そうですね。

岡田 東大では一札反省文を入れれば退学者も復学できますが、京大では戻れない。東大には統一基準があるが、それでもおなじ規則違反でも文学部では一〇月闘争で処分者は出ませんでした。総長や学部長は、スト決議の責任者といっても形式犯で、学生組織のなかで順番で割り振っているだけだ、との認識です。処分学生と総長・学部長は互いに気心知った交渉相手です。したがって時間がたち、「反省」すれば「いつでも復学させる」のが暗黙のルールでした。

処分した総長南原先生は処分学生の将来を常に心配され、七三年被処分学生の一人高沢君の衆議院議員初当選を祝って、処分した南原（当時総長）、有沢広巳（当時経済学部長）両先生が祝賀会を開き、卒業生旧友の再会を喜んでくれました。「東大南原一座」の浪花節の感もありますが、一九会はこの祝賀会での再会から始まり、本年まで三五年続いた国際派同窓会です。これには南原さんの人柄もありました。強面（こわもて）の矢内原さんではこうはいかない。五五年、私はわだつみ会事務局ともども矢内原総長に東大から追い出されました（私は卒業していましたが処分はされません）。

教授会・総長の処分権は当然です。だが大学に秩序が戻り安定すれば処分学生のリハビリが必要です。運動の責任者はいわば「思想犯」「政治犯」の類で反省すれば復学を考慮していい。私の経験ではカンニング犯と異なり、処分覚悟で運動責任を負う学生には俠気があり、見所があります。学生には将来があります。いつまでも秩序違反はしないでしょ。復学措置は教育者としての学校当局の心がけでないでしょうか。南原総長からは青い幼稚な学生を育てる愛情を学びました。

田中 京大は放校ですね。

岡田 早大も除籍です。学籍が抹殺されますから復学はありません。私学だから授業料は高いし、除籍では市民社会への復帰も難しい。東大の反省文はほんの形式でいいのです。

田中 佐藤さんが書いていますね¹⁸。京大は厳しいですね、滝川総長の時に一番ひどかった。

岡田 ええ、あれはひどい。松尾尊兌さんの『滝川事件』（岩波書店 二〇〇五年一月）という本がありますが、戦前一九三三年、時の文相鳩山一郎氏は京大教授滝川幸辰氏の著書『刑法読本』を危険思想として休職を要求、大きな思想弾圧事件として全国の教授学生の抵抗運動を巻き起こしました。日本社会はこの時から急速にファシズムに傾きます。敗戦後滝川教授は凱旋將軍のように京大に復帰します。そこまでは良かったが復帰に際して滝川氏は

強大な人事権を大学に要求し認めさせ、以後京大に絶大な権力を揮い、かつ学生運動を厳しく取り締まることとなります。ファシズムの犠牲者が一転みずからファシズムを実行する事態です。松尾氏は戦前の犠牲者滝川と戦後の暴君権力者滝川は本質上別人格とすべきだ、として戦前の氏を「瀧川」と本字で表示し、戦後の氏を「滝川」と略字で表示します。本は戦後の横暴なる滝川論です。東大でもファシズム犠牲者に英雄気取りがなかったわけではありませんが、こんな変質は寡聞にして知りません。戦前の「瀧川」ゆえに戦後の「滝川」を許したのは京大教授会の汚点です。

田中 そうですね。米田豊昭さんが戦後の滝川氏について批判していました。

岡田 米田君、知っていますよ。私は国際派の復帰組で、先に述べたように反戦学生同盟の解散からわだつみ会事務局に移り、卒業後も東大御殿下グラウンド地下の事務局に居残っていました。全学連を乗っ取った主流派は東大に足場がなく、委員長を東京の本部に送り込みますが東大に知人がいない。そこで私は復帰した党の学生対策部（学対）で会う二代目全学連委員長玉井仁君（京大）や三代目米田君に不案内な東京を教えたりしたのです。二人ともわだつみ会事務局を頼りにしました。玉井君はわだつみ会事務局員と結婚しました。その後玉井君とは音信不通ですが、米田君とは時折連絡がありました。武井君と対立したのは玉井君ですが、演説は段違いに下手でした。武井君は上手です。

田中 米田さんは京大天皇事件に関わられましたね。

岡田 天皇事件は中岡哲郎君が中心だったのでしょう？ 質問状は彼が書いたといえます。

田中 そうですね。中岡さんとお会いになったことはありませんか。

岡田 中岡氏とは面識はありませんが、労働経済研究では業績があり研究者としては良く知っています。『工場の哲学』（平凡社一九七一年九月）は名著です。

（つづく）

〈注〉

（1） 武井昭夫『層としての学生運動——全学連創成期の思想と行動』（スペース伽耶 二〇〇五年六月）には、「一九四八年春、東大学生自治会中央委員会の中で全学連結成をすすめる仕事の担当を先任者から受け継いだ」（一〇頁）、「全学連結成までの遡る一年間ほど、わたしが所属した東大学生自治会中央委員会は、全国の国公立校を運動に結集することに努力を傾けていた。」（五七頁）等の記述がある。

（2） Cominform（＝ヨーロッパ共産党・労働者党情報局）による日本共産党批判。占領軍を解放軍と規定し合法的な革命を目指す、当時の日本共産党の路線を誤りと指摘した。

（3） 岡田裕之氏に対しては、今西一も二〇〇九年六月にインタビューを行っており、小樽商科大学『商学討究』にその記録

を掲載している（第六〇巻 第二・三合併号、第四号）。今西は岡田氏の生い立ちから一高入学までのこと、さらにその後の「わだつみ会」での活動まで、広範にわたってインタビューを行っている。その中には、一高・東大における学生運動に関する記録も含まれているが、筆者とは異なる観点からインタビューがなされている。

(4) 第一 自重の念を起して廉恥の心を養成する事

第二 親愛の情を起して公共の心を養成する事

第三 辞讓の心を起して静肅の習慣を養成する事

第四 摂生に注意して清潔の習慣を養成する事

(5) 当時早稲田大学の学生であった大金久展は、以下のように証言している。

「東大と違って早稲田は『宮本派』一色ではなく、さまざまなかグループが存在し、相互に激しく対立するという側面もあったが、基本的にいって『反レッド・パージ闘争』に関するかぎり全く意見の相違はなく、それぞれが自分の信ずる方法でこれに参加した。これとどのように闘うかがそれぞれのグループの試金石だと信じられていた。」（大金久展『神山分派』顛末記）（『早稲田 1950年 史料と証言』第4号 一九九九年六月）三七頁）

(6) 詳細は、岡田裕之「一六人軍裁事件からわだつみ会の運動へ」〔『一・九会文集』第一集 一九九七年一月〕一二九―一五七頁を参照。なお、「一・九会」とは、東大国際派共産党細胞

の同窓会組織であり、その設立の経緯は以下の通りである。

「一九会は、一九七三年一月九日、高沢寅男代議士の初当選を祝う会に端を発します。その日、南原繁・有沢広巳両先生を迎え、一九四七年から五二年にかけて高沢君と行動を共にした仲間、つまり南原総長、有沢学生委員長から退学や停学の処分を受けた学生たちが集まりました。あれから二〇年余、歳月は六〇年安保と全共闘の二つの世代を間にはさみ、われらの時代を回想の段階に追いやっていたのでしよう、会は文字通り和氣堂に満るものでありました。それが毎年一月九日を卜して集いを持つようになった所以です。」（第一集「はしがき」）

(7) この事件の概要については、山中明『戦後学生運動史』（群出版 一九八一年）一七四―一七八頁に述べられている。

(8) 被害者の一人である廣松渉は、自身の回想録である『哲学者廣松渉の告白的回想録』（河出書房新社 二〇〇六年三月）にて、この事件について語っている（一〇九―一一六頁）。また、この事件の詳細については、『資料 戦後学生運動 3』（三一書房 一九六九年四月）七七―七八頁に述べられている。

(9) 岡田裕之『我らの時代―メモワール 平和・体制・哲学』（時潮社 一九九九年五月）三九―四〇頁

(10) 武井前掲書 六八―六九頁

(11) 四八年一〇月、長野師範学校において、八名の共産党員が退

学処分を受けたことに対し、抗議のためのストライキを組織するよう全学連から安東らが派遣された。詳細は安東仁兵衛『戦後日本共産党私記』（文春文庫 一九九五年五月）五一—五六頁を参照。

- (12) 福岡高等学校学而寮においては一九四〇年、従前の寮生による自治から、校長をはじめとする学校当局の管理下へと移された。生徒の入退寮や委員（幹事）の任命も学校側が行うこととなり、寮の自治・自由は大幅に制限されることとなった（『日本戦没学生思想』五九—六一頁）。

- (13) 四三年五月、安倍能成校長は、寮委員の任命制を形式上導入することにより、軍部からの干渉を回避しようとした（『第一高等学校自治寮六十年史』二六五—二六六頁）。

- (14) 『早稲田 1950年 史料と証言』別冊・資料篇（二〇〇〇年六月）所収の安倍徹郎編「1950年を中心とする早稲田大学学生運動史年表」によると、五〇年一〇月一七日に「早大、第1次早大事件、大学と警察『平和と大学擁護大会』を弾圧、学生、一四三名逮捕」とあり、また同月二八日には「早大、学生八六名を処分、うち文学部三六名はすべて除籍」されたとある。

- (15) 武井前掲書 六三—六五頁

- (16) 四八年の早大授業料値上げ反対・教育復興闘争については、『資料 戦後学生運動 1』（三一書房 一九六八年二月）三一九—三二〇頁に詳しい。

- (17) 「最近の学生運動」〔『資料 戦後学生運動 2』（三一書房 一九六九年二月）九—七九頁所収〕

- (18) 佐藤経明「退学復学前後 —私の山田盛太郎先生追想—」（東京大学経済学部経友会『経友』九一号 一九八一年九月）一四—二二頁。

（たなか さとこ）お茶の水女子大学大学院